

## きのご歳時記2 — 芭蕉時代の俳諧より —

今野 英山

前回は江戸の古川柳から茸の句を紹介してみた。同様に俳句・俳諧での茸の句を時代を追って紹介してみたい。川柳における茸の句というのは比較的わかりやすいと言うか、ばれ句も含めて愉快な句が多い。川柳はもともと、俳諧連歌の前付けというものから独立した文芸である。同じ俳諧連歌の始めの句（発句）を独立させたのが現在「俳句」と言われるものである。もともと俳句という言葉は明治になってから正岡子規が言い出したことなので、芭蕉の時代にはあくまで俳諧ということになる。俳諧は川柳と同じく元々の成り立ちから滑稽や意外性という本質があるので茸向きかもしれない。調べてみると、俳諧の題材として茸は実に多く登場している。それだけ茸が当時の庶民にとって日常的なものであったということが言えそうである。

芭蕉が確立したといわれる文学性豊かな近世の俳諧は、それまでの俳諧連歌とはどのような違いがあったのか。芭蕉以前の俳諧連歌の代表的アンソロジーである山崎宗鑑編の「犬筑波集」の連句を紹介すると

秋山に 前しどけなき人いりて

松たけなりと 人はみるらん

■品のない句である。前しどけなきとは前をはだけたという意味である。要するに貴族の遊びであった連歌を庶民のものとするために、滑稽という視点を入れ、それが低俗に流れてしまったのである。その後、芭蕉も学んだ貞門派や談林派の俳諧が台頭し覇を競うことになる。それぞれ茸の句が残っている。

猫舌も くふあつものや ねずみたけ（北村季吟）

■北村季吟は芭蕉の京都時代の師で、貞門派の代表的俳諧連歌師である。貞門俳諧の特徴は言葉の連想によってつながっていく。この句でも猫舌（ネコ）なのに熱々のねずみたけ（ネズミ）を食うという言葉上のおかしさを言っている。

松茸に 相生の名あり 嵯峨よし野（西山宗因）

■西山宗因は談林派を確立した俳諧連歌師で、後に「好色一代女」などの風俗小説（浮世草子）で名をなす俳諧界の鉄人、井原西鶴の師匠である。談林派の特徴の一つに人生を詠む点がある。相生というのは、謡曲高砂に出てくる相生の松で、一つの幹から二本の幹の出で共に長生きすることを指している。松茸は夫婦長生きの象徴というわけである。

### 松茸やひとつ見付し闇の星（山口素堂）

### 茸狩や見付けぬさきのおもしろさ（山口素堂）

■山口素堂は芭蕉と同時代の俳友である。この頃になると茸そのものや茸狩りの風情や面白さを詠む句が増えている。闇の中で一つだけ星を見つけたようだと言った素直な句である。

さて、いよいよ芭蕉である。

従来の俳諧連歌にあきたらず、常に新しい俳風を目指したことで知られ、井原西鶴が人生詩人であるなら芭蕉は自然詩人ということに対比される。茸の句も幾つか残している。



芭蕉 座像

### 茸狩やあぶなきことに夕時雨（松尾芭蕉）

■時雨というのは晩秋の雨である。今と違ってろくな雨具のない時代には山の中で雨に会うというのはかなり危険なことだったのである。

### 松茸や 知らぬ木（こ）の葉のへばり付く（松尾芭蕉）

■以下はあくまで筆者の想像である。当時といえども松茸はうらやむ存在である。「松茸を何か云いたく披露して（武玉川）。ある時、誰かが立派な松茸を採ってきた。一体どこで採ってきたのか。よく見ると見知らぬ木の葉が付いている。あんまりこころでは見えない木の葉だ。もしかしたら一山越したあたりではないか。というような疑心暗鬼の句と見たのだが。

### 初茸や まだ日数経ぬ 秋の露（松尾芭蕉）

■秋に入ってまだ幾日も経たないのに、早くも初茸が露をかぶった初々しい姿で顔を見せている。あるいは、まだ出始めの初茸なので秋の露のようにほかない印象をこめていられるのかもしれない。最近では初茸もめっきり数が減ってきたので、この解釈がしっくりくる。

以下芭蕉の弟子たちの句を紹介する。

### 松茸や 人にとらるる 鼻の先（向井去来）

■去来は関西蕉門の中心人物。京都嵯峨野に落柿舎を営む。鼻の先とは鼻先かるたのことで、目の前にあつても気づかず人に採られてしまうことを言う。同じ蕉門の十哲である榎本其角にもこれと酷似

した句がある。はたしてどっちが先なのだろうか？

茸狩や 鼻のさきなる 歌がるた(榎本其角)

初茸の 盆と見えけり 野老(ところ) 売(榎本其角)

■野老(ところ) はヤマイモ科の植物でかつては食用にしていたらしい。露天で売っているところを覗くと初茸の入った盆ざるもあるようだ、ということか。

茸狩や 黄蕈(いくち)も兒(ちご)は嬉しがほ(堤利合)

■最近でこそイグチは人気のある茸である。この句にあるように江戸時代ではイグチのような雑茸は子供ぐらいしか喜ばなかったようだ。マツタケ、ハツタケ以外ではシメジ、エノキダケ、サクラシメジ、シヨロロなどが詠まれている。

しめじぞよ どこで聞いても 狩るな川(広瀬惟然)

山路経る こゝちや菊にえのき茸(服部風雪)

松の香は 花とふくなり さくら茸(榎本其角)

釣鐘の いぼの落ちたる 松露かな(椎本才麿)

いづれも芭蕉の弟子達の句である。

こんな面白い句もある。

簀の子茸生ふる 五月雨(さみだれ)の中(越智越人)

■五月雨は今でいう梅雨のことなので、気がつくとも風呂場か土間のすのこに茸が生えていたという句。皆さん、松本零土の作になる「おとこおいどん」こと大山登太が押入れの中で生やした「サルマタケ」を思い出しませんか？いったいあの茸は何茸なのでしょう？

その他、芭蕉の弟子たちの秀句を紹介したい。

郭公(ほととぎす) たしかに峰の早(き)松茸(内藤丈草)

■ほととぎすは時告げ鳥といわれている。確かにその通りで鳴き声が聞こえる時は季節のさきがけのマツタケが生えているではないか、という句。

初茸に 紛(マギ)るゝ庵や 松の中(各務支考)

■こんな環境の中に一度でいいから住んでみたいものだ。

松茸の 山かきわくる 匂ひかな(各務支考)

■これもすごいことだと思う。

茸狩や薄(すすき)の疵(きず)は数しらず(水田正秀)

■茸狩に夢中になって、ススキの切り傷だらけになったという句。まったく同感。

松茸をあはててとるや笠ばかり(水田正秀)

■この句にはまったく同感できない。現代では慌てて採るほどマツタケなんてありやしない。傘の開いた大物がこっちもあっちにもあり、早く採らないと人が来てしまうという情景が浮かんでくる。うらやましい限りである。ちなみに水田正秀は滋賀県膳所での芭蕉のスポンサーである。恐らくかなりの金持ちであったと思われる旦那衆が茸採りに夢中になっているというのがこの句の面白さかもしれない。

次回は蕪村や一茶を中心に江戸時代後期の俳諧から茸の句を紹介する予定。